

遺伝子分析科学認定士試験への挑戦 ～ 8年連続挑戦の歴史とその意義～

くぼた

久保田 ともよ、生江 麻代、望月 泰男、谷口 智也、檜山 由香里、香取 尚美、山藤 賢
(昭和医療技術専門学校)

【はじめに】平成19年度より実施されている「遺伝子分析科学認定士」認定試験は、平成26年度に第8回を迎えた。本校では初年度より毎年、希望する第3学年生が受験し多くの先輩方が合格を果たしている。第3回日本臨床検査学教育学会学術大会において、「遺伝子分析科学認定士への挑戦」として報告がされているが、8年目の挑戦を迎えた今、その挑戦の歴史と意義を考察する。

【対象及び方法】本校臨床検査技師科、平成19年度～平成25年度における第3学年生の遺伝子分析科学認定士試験受験者計143名および平成26年度第3学年生24名の当該認定士受験希望者を対象とし、そのアンケートを中心に考察する。

【結語】アンケートの結果から、合否に関わらず、遺伝子分析科学認定士取得を志し、受験をするということ自体が我々にとって利益になりうること、学校の充実したサポート体制があるとは言え、内発的な動機に基づく学習であることなどの理由で資格取得へ挑戦することを選択していることがわかる。本校では、第3学年生は4月より6か月間の臨地実習が始まるため、学習環境は大きく変化する。加えて、試験自体が難解である上に、6月に行われる試験であるということもあり、多くの学生が受験を躊躇する。また、その中で受験を希望する者も決して遺伝子検査学を得意としている者たちばかりではない。そのような学生が遺伝子分析科学認定士を志すことは何より我々自身にとって大きな意義がある。また先輩方の残した結果が本校のシラバスには掲載されているが、その紡いできた歴史と、約55%の合格率は、良くも悪くも、そのチャレンジの結果と受け止め、我々の受験動機にも結びついている。本抄録の段階では我々は未体験であるが、学会発表時には試験の合否が出ている。我々の結果も含め、考察に加えたいと考えている。